

慢性咳嗽を主訴に耳鼻咽喉科外来を受診した患者の原因と治療

阪本浩一

兵庫県立加古川医療センター 耳鼻咽喉科

【はじめに】近年慢性咳嗽を訴えて受診する症例は、耳鼻咽喉科外来でも増加傾向にある。咳嗽の原因として、気管支喘息、喘息咳、アトピー咳嗽等の呼吸器内科疾患、胃食道酸逆流症等の消化器内科疾患と並んで、後鼻漏、喉頭アレルギー等の耳鼻咽喉科疾患も原因疾患として重要とされている。今回、われわれは、後鼻漏と咳嗽の関連を中心に、喉頭アレルギー、喉頭酸逆流を念頭においた鑑別診断について検討した。

【対象と方法】対象は、2005年4月から2008年5月までに兵庫県立加古川病院耳鼻咽喉科を鼻炎症状、咳嗽を主訴に受診した症例のうち、急性炎症、腫瘍性疾患を除外した54例。男性21例、女性33例。年齢は32歳から82歳（平均年齢57歳）全例、咳を主訴にもっていたが、そのうち19例（35%）は何らかの鼻症状も訴えていた。これらの例に、後鼻漏の有無、鼻疾患（副鼻腔炎、アレルギー性鼻炎）、喉頭アレルギー、胃食道酸逆流（GERD）の関与を念頭において鑑別診断を試みた。GERDの鑑別の補助にFスケールを用いた。また、鼻汁、および咽頭スミアにより、好酸球、好中球を評価した。それぞれの鑑別診断に基づいて治療を行った。

【結果と考察】後鼻漏（48%）、胃食道酸逆流（44%）はそれぞれ相互に合併している例が多く認められた。喉頭アレルギーの関与が示唆される、鼻腔および咽頭スミアにより咽頭にのみ好酸球が認められる症例が存在した。（16例）治療に関しては、それぞれの疾患に応じてPPI、六君子湯、マクロライド系抗生物質、粘液溶解剤、抗アレルギー剤を組み合わせで処方した。代表的な症例を提示し、耳鼻咽喉科における慢性遷延性咳嗽への臨床的対応の現況を示したい。